

Contents

Information	1~2
Activities	3~4

Association of Japan Editing & Creation

【事務局】 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-37-4 友田三和ビル3F
TEL 03-3296-0769 FAX 03-3296-0779 URL <http://www.ajec.com/>

一般社団法人日本編集制作協会 発足

日本編集制作会社協会（東京都千代田区、理事長：細江弘司）は、2008年12月1日、社団法人の登記を完了し、「一般社団法人 日本編集制作協会」（略称：日編協、英文表記：Association of Japan Editing & Creation、英文略称：AJEC）として新たなスタートを切りました。

当協会は1983年4月に、編集制作を手がける約30社が集まり、「日本編集プロダクション協会」として発足しました。以来、25年余にわたり編集制作のスキル向上、顧客との信頼関係の強化促進、安定したパートナーシップの構築・維持を目指し、さまざまな活動を行ってきました。会員は70社を超え、一般書、教材、企業出版、デジタルメディアなど、あらゆる編集制作に携わっています。また、PR、デザイン、写真撮影、DTP、テーブルライトなどを専門とする会社もメンバーに加わっています。

社団化は当協会にとって長年の夢であり、何度もチャレンジしたことがありました。特に1988年に協会名称を変更し、会員社も急速に増加した時期には、理事会で社団化のための小委員会を設置。通産省産業政策局（当時）など

に出向き、社団化の可能性などについて打診したことがありました。しかし、当協会の予算は社団化が認められる一定の規模に達していなかったこと、また業界団体としては組織率が低かったことなどもあり、社団法人として認可されるには至りませんでした。

その後も、協会は社団化を模索しましたが、バブル崩壊後の長引く景気低迷や出版不況、そして編集制作業の不安定さなどもあり、社団化は遠い存在となっていました。

しかし、2006年4月に国会で公益法人制度改革法案が成立し、これまでの社団法人が一般社団法人と公益社団法人に移行することになり、一般社団法人は主務官庁の認可制ではなく、登記制になることが決まりました。これを受け、当協会では2年前から社団法人準備委員会を発足し、会員に対して意見収集を行うとともに、現定款の制度上の不備などを修正し、2008年12月1日の法律施行とともに、社団法人の登記申請を行ったものです。

今後、日本編集制作協会は一般社団法人として、従前通りのさまざまな活動を積極的に行っていきます。

協会の沿革

1983年	・日本編集プロダクション協会創立。初代理事長に菅野尚氏が就任。例会・部会・委員会の設置、料金表・契約書ヒナ型、会員名簿の作成、会報などを発行	1996年	・第1回「AJEC賞」を選考 ・「マスコミを動かす編集プロダクション」を発行
1987年	・「編集プロダクションの将来展望」発行	1999年	・第5代理事長に須藤靖夫氏が就任。東京国際ブックフェアで「編集制作プロダクションフェア」を開催
1988年	・第3代理事長に高雄宏政氏が就任。日本編集制作会社協会に改称。意見集約のための諮問機関「拡大協議会」を設置し、賛助会員制度を導入。現在の組織体制が整う ・会員社の経営実態を調査した「経営白書」を発行。以後、毎年アンケート調査を実施し、白書を発行 ・「経営研修セミナー」を開催。この合宿形式のセミナーが夏の恒例行事として定着 ・AJEC親睦ゴルフ大会開催。以来、毎年春と秋に実施され、通算40回を超える	2002年	・台北市雑誌公会（組合）シンポジウムに参加 ・第6代理事長に檜森雅美氏が就任。会報をニュースレター形式にリニューアル。準会員制度を導入
1989年	・協会初の海外視察旅行として、フランクフルトのブックフェアのほか、欧州3か国の出版社などを訪問 ・第1回「作品展」を開催	2003年	・創立20周年を記念し、編集制作プロダクションフェアで元木昌彦氏、花田紀凱氏らを招き、特別セミナーを開催
1991年	・第1回「新人編集者のための編集セミナー」を開催。現在の「編集技術講座」の前身となる	2004年	・外部にも呼びかけ「拡大編集セミナー」を開催
		2006年	・第7代理事長に細江弘司氏が就任。年10回の体系的な教育カリキュラムである「編集技術講座」を開講。全課程を受講した人に修了書を交付 ・新たな顕彰制度として「日本編集制作大賞」を創設。会員がエントリーした作品を東京国際ブックフェアの協会ブースに展示し、来場者が審査
		2008年	・協会創立25周年を記念し、永年会員に記念の楯を贈呈 ・一般社団法人に移行し、名称を日本編集制作協会に改称

社団法人移行に向けてのご挨拶

一般社団法人日本編集制作協会 理事長 細江 弘司

会員の皆様には日頃より協会活動にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

日編協は一般社団法人の設立申請書類を12月1日に提出し、おかげさまで無事登記を完了しました。

「協会を法人にしよう」と言いだしてから、かれこれ20年もの長い時間が過ぎました。その間、社会状況は大きく変わり、高度経済成長、バブル、バブル崩壊、そして最近ではアメリカ発の世界同時不況と、世の中は激しく動き続けています。しかも、我々を取り巻く経済環境は年々厳しさを増しています。

そんな中で、当協会が念願の法人化に移行することができたのも、長年にわたって協会活動を支えていただいた会員の皆様のお力添えのたまものと、心より感謝を申し上げます。

☆☆☆

ここに来て、明るい話を聞くことが少なくなりました。なかでも出版業界は良いニュースがありません。ただ、暗い話題ばかりを並べ、世の中のせいにしても、何も問題は解決しません。自分の力でこの状況を切

り開いていくしかないのです。

協会では法人化を機に、より一層会員の皆様のお役に立てばと考えています。具体的には、会員社の社員の方々の教育に、より一層力を入れていく所存です。

会員の社員の皆様がより力をつけ、各社の社業が発展することが、編集者の活性化につながり、結果として出版業界の発展にささやかながら寄与することができるのではないかと考えています。そこにこそ、当協会が社団化した意味もあります。

2つ目として、広報活動に力を入れていきたいと考えています。

現在、編集プロダクションの数は、NTTの電話帳などを見ると、都内だけでも600社以上あり、その多くが非会員です。これらの会社の方々に、当協会の存在を知っていただくとともに、参加を呼びかけていきたいと思っています。

社会環境がこのような厳しい時代だからこそ、互いに情報を交換し、編集の力を磨いていくことが大切だと考えます。

また、広報活動を出版社にも行っ



ていきたいと思っています。出版社の中には、当協会があることすら知らない方がまだ数多くいます。協会が編集者の育成に力を入れ、出版業界に貢献している姿勢をアピールしていくことは大切です。そして、出版社の方々に当協会の活動に賛同していただき、賛助会員になっていただるように働きかけていきたいと思っています。

☆☆☆

これから日編協は、一般社団法人として新たなスタートを切ることになりました。理事一同、決意を新たにし、協会の一層の発展に努力するつもりです。皆様のご協力をお願いいたします。

Admission

新入会員社紹介

正 有限会社 カラーズ・ファクトリー

住 所 〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町1-2 タイホービル201
TEL. (03) 5206-2585 FAX. (03) 3269-7073
URL <http://www.colors-factory.com>

代表者 代表取締役 米村邦子 設 立 2003年4月

取引先 国内の主要大手出版社、広告代理店、大手印刷会社など

特 徴 グルメ・旅行からマネー、企業系まで、幅広いジャンルの制作を手がける総合プロダクション。ベテランの外部スタッフとの連携により、読者およびクライアントが望む最適なソリューションを提供します。

正 有限会社 編集工房あゆい

住 所 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-28加瀬ビル4F
TEL. (03) 3262-6745 FAX. (03) 3262-6746
URL <http://www.ayui.jp/>

代表者 代表取締役 村瀬次夫 設 立 1982年4月

取引先 法研、中山書店、日本エステティック業協会ほか

特 徴 企画力とクオリティで、いきいきと、しみじみと生きていくための情報を発信します。また、業務拡張にともなう環境整備とセキュリティ強化などのために、幕張新都心への移転を予定しています。

◆第5回「拡大編集セミナー」開催

AJEC主催、「本の街・神保町を元気にする会」後援による第5回「拡大編集セミナー」が、2008年10月30日に東京・一ツ橋の日本教育会館で開催されました。このセミナーは、会員社の社員教育と業界全体のスキルアップを目的に毎年実施しているもので、第一線で活躍するベテラン編集者をはじめ、書店や取次関係者などを講師に迎え、出版業界の現状や今後の展望などについて講演します。今回は以下の4人の講師からお話をいただきました。

◆第1部 「ケータイ小説」ヒットに見る出版の未来像

出版プロデューサー「ケータイ小説活字革命論」著者 伊東 寿朗 氏

「ケータイ小説」が注目を集めています。2007年には年間ベストセラー（単行本／文芸部門）の上位を独占。最近では瀬戸内寂庵さんが執筆し、単なる若者文化ではなく、出版文化の新しい形としての可能性も試されています。ひとまとめにケータイ小説といっても、火付け役となったYoshiさんのようにビジネスとして書かれた作品や、有料で配信されるプロ作家の作品、そして主流である投稿サイトに一般人が投稿する作品などがあります。著者も読者も一般のサイト利用者で、既存の出版物よりも書き手と読み手の目線に近いのが特徴です。そのためか、ケータイ小説の書籍化は多くの場合、読者の熱心な声によって決定します。また、その熱心な読者が書籍を購入し、話題を広げていきます。その一方で、ケータイ小説も次第にユーザー不在のマーケットになりつつあるという不安があります。今後は、ケータイ小説が生まれた背景を見つめ直す原点回帰の方向と、洗練されたプロ志向の市場に拡大していく2つの方向に分かれていくと考えられます。



1967年大阪生まれ。明治大学商学部卒。編集プロダクション・出版社勤務などを経て、2004年(株)魔法のいらんど入社。「恋空」など500万部以上のケータイ小説を書籍化。07年10月独立。著書に「ケータイ小説活字革命論 新世代へのマーケティング術」(角川SS新書)など。

◆第2部 雑誌受難時代に活路はあるか！

プレジデント社「プレジデントFamily」編集長 鈴木 勝彦 氏

「プレジデントFamily」は、当社にとって15年ぶりとなる本格的な雑誌創刊でした。本誌では読者が何を求めているのか、何に困っているのかという視点から「家族」をテーマとし、中学・高校の受験生を持つ家庭の都市型雑誌を目指しました。企画を決めるときに重視するのは目次です。メインタイトルに合わせて、さまざまなパターンの目次を企画が決定するまで作ります。同じようなテーマでも、方法論が違えば別の記事になりますから、オリジナリティのある企画を考え、「面白い」か「面白くない」という基準のみで記事を評価します。編集会議はありますが、本当の意味での編集会議は日常の会話だと考えています。これは雑誌の品質をコントロールするのにとっても重要です。また、「なぜ？」という疑問を持つことを編集部員に日々求めています。雑誌不況が叫ばれて久しいですが、ほかのメディアにない雑誌の強みを生かし、誌面を充実させ、読者との接点を持ち、コンテンツが面白ければ、消費者は飛びついてきます。雑誌にも十分に活路はあると考えています。



1968年静岡県生まれ。慶應義塾大学商学部卒。(株)プレジデント社入社。94年より「プレジデント」編集に携わり、03年副編集長。05年11月と06年3月に「プレジデント」の家庭版別冊「プレジデントFamily」刊行。06年4月「プレジデントFamily」編集長。同年7月より月刊化。

◆第3部 編集プロダクションに期待すること

株式会社小学館 取締役 出版局担当 大山 邦興 氏

現在の出版不況を考えると、私たちは自分の携わる一部だけでなく、出版業界全体を見渡す必要があります。まず編集面では、魅力ある出版物とは何かが問題となります。その答えは、自社または個人の得意分野は何なのかを考えれば、自ずと見つかるはずです。流行っているからという理由で企画したものは売れません。売れる出版物を作るためには、ノウハウの蓄積＝アドバンテージが必要です。流通面では、書店・取次のあり方という問題があります。欲しいときにものがなければ、消費者は買ってくれません。そのため、すぐに買える状況を作ることが重要です。また、どうやって新刊の発売を読者に伝えるのか、価値観の多様化にどう対応するのかという問題もあります。紙というメディアは、他のメディアとの共存が可能です。情報発信元として認識されていますし、より正確な情報が欲しい場合には、やはり出版社に頼ってきます。今後、出版社はコスト削減と同時に、①発想・着想力、②編集力、③マーケティング力をキーとし、多様なコンテンツ展開を目指すことになるでしょう。



1946年生まれ。69年同志社大学卒業。(株)小学館販売関西支社入社。82年小学館販売書籍販売部。94年小学館美術編集部。「土門拳の昭和」などを担当。2001年ウイークリーブック「古寺をゆく」編集長ほか担当。06年DVDブック「魅惑のオペラ」創刊。07年出版局取締役就任。

◆第4部 出版社は書店をどう生かすのか！

有限会社信山社 岩波ブックセンター代表取締役 柴田 信 氏

読者は不特定多数な上に、個別的欲求に基づいて本を購入します。どんな企画を誰が買ってくれるのかを明確に知ることはできませんが、書店で販売することだけは決まっています。出版社の営業部が不特定多数を少し特定したものを、書店がさらに特定して、読者に届きやすいように付加価値を付けて販売します。すべての本は、①暇つぶしのための自己目的、②実用、③知のヒエラルキー、④宗教に分けられます。①は完全に携帯電話に負けてしまいましたし、③も崩壊しました。ただ、宗教本だけは根強く売れています。このようにジャンルを特定するのも、すべて不特定多数を特定するためです。現在、返品問題や出版不況など多くのことが言われていますが、30年前から流通の問題は一向に変化していません。書店は新刊の出版をとりあえず伝えなくてはいけないというのが仕事です。現行制度の枠内では、大量に届く新刊本も含めて、業界の矛盾をすべて受け入れ、役割を果たすしかありません。そうした中で、書店の自立を模索していくのではないのでしょうか。



日本大学文学部卒。中学校教員、(株)芳林堂書店取締役営業部長を経て現職。「本の街・神保町を元気にする会」理事・事務局長として、大手出版社社長などと共に、神保町の復権に尽力。日本エディタースクール講師。著書に「出版販売の実際」(日本エディタースクール出版部)など

第3期 編集技術講座 (第7回、第8回)

11
20 12
18

第3期「編集技術講座」の第7回講座が11月20日に開催され、柴田書店書籍編集部部長の猪俣幸子氏が、「10年、20年と重版する料理書作りの秘密～“料理本の柴田書店”と言われるわけ～」と題して講義しました。



第7回講師の猪俣幸子氏

また、12月18日に開催された第8回講座では、学習研究社「大人の科学」元統括編集長の湯本博文氏が、「自分が面白

いと思うものを作る。楽しいと思うものを作る。それがヒット作品になる」と題して講義しました。

第3期編集技術講座は、今後、2月19日と3月26日を予定しています。3月26日の最終講座終了後には、全カリキュラムを受講した方に修了証を授与し、懇親会を開催します。受講はスポット(1講座3,000円)でも受け付けていますので、ご案内の申込みに記載してFAXでお送りいただくか、事務局までご連絡ください。



回数	日付	テーマ
第9回	2月19日	ラックから即日なくなるフリーペーパーの作り方
第10回	3月26日	イメージをアップさせる企業出版

※いずれも講師は未定。テーマは都合により変更することがあります。

教材・デジタル合同部会

9
25

教材・デジタル合同部会が、9月25日(木)18時30分から東京・神田の「ふくるる」で開催され、13名が参加しました。参加者は今年度後半から来年度に向けての版元の動向や、学習指導要領の改訂に加え、デジタルパブリッシング、モバイルメディアの現状についての情報交換を行いました。



秋季ゴルフコンペ

10
2

第41回秋季ゴルフコンペが、10月2日(木)に茨城県的美浦ゴルフ倶楽部で開催されました。当日は5組20名が参加し、(株)カルチャー・プロの須藤洋子氏がネット71(グロス96、HC25)のアンダーパーで優勝しました。準優勝は(株)メイテックの坂本宜男氏、3位は(株)キャデックの平田嘉男氏でした。



秋の例会

11
13

秋の例会が11月13日(木)19時00分から東京・神保町の学士会館で開催されました。今回は人事・採用コンサルタントの鈴木あきら氏(株)オフィス・サンタ社長)が、「日本語の通じない若者たち～今、採用の現場で何が起きているのか～」と題し、採用戦線の現状について講演を行いました。



忘年会

12
11

2008年最後の行事となる忘年会が、12月11日(木)18時30分よりコートヤード・マリオット銀座東武ホテルの宴会場「ロジェドール」で開催されました。今回は12月1日に一般社団法人の登記が完了したことを受け、当日は会員のほか、例会や編集セミナーで講師を務めていただいた方々も出席。参加者は60名を超え、盛大な懇親会となりました。



2009年版「EDITOR'S DIARY」発行

協会が毎年発行している手帳「EDITOR'S DIARY」の2009年版が、このほど発行されました。手帳としての機能に加え、会員会社の概要、編集制作料金基準表、改正下請法、関連団体の連絡先なども掲載しており、編集制作に関わる人にとって必携アイテムとなっています。定価は1,300円(会員価格1,000円/税込、送料別)。ご購入を希望される場合は、事務局までお申し込み下さい。

